

小川未明「眠い町」の教材性 —教科内容構成の実践—

小 埜 裕 二*

(平成29年2月28日受付；平成29年5月11日受理)

要 旨

本稿の目的は、文学研究の成果を文学教育に活かすための方途を「教科内容構成」に関する授業者の能力育成の観点から検討してみることにある。教員養成大学で文学教育を受ける学生は、読解力を修得するだけでなく、教材の体系性や系統性を適切に理解し、どこから整理をはじめ、順を追ってどこまで教えるかを見極める力の修得が求められる。そうした力を育成するためには、作品読解の能力を「読むこと」「解釈すること」「批評すること」の各次元において高めるとともに、読解した内容を細分化する能力、細分化した各要素の教材的価値をはかる能力、教育課程をふまえた目的を設定する能力、提示の仕方や組み合わせを考える能力、必要な資料を揃える能力等を修得する必要がある。本稿では、それら諸能力の修得を前提に、設定した文学教育の手順の有効性が具体の文学テキストに適用した場合に認められることを明らかにした。例に挙げた文学テキストは、小川未明の童話「眠い町」である。

KEY WORDS

読むこと、解釈すること、批評すること、教科内容構成、郷土教材、小川未明

1 「教科内容構成力」の育成

教員養成大学における文学教育は、文学部で行われる文学教育と同じではない。教育現場に立つ授業者が教材を読解する高い能力を持っていないければ、生徒の種々の読解を受け止めることは出来ないから、読解能力を高める文学教育の側面は共通するが、教員養成大学で学ぶ学生が授業で扱う作品は、読解した内容について、何を、どこまで、どのように児童生徒に教えるかという指導方略に関わる視点が加わる。何を、どこまで、どのように教えるかを、教員養成大学の学生は常に意識しながら文学作品を読む。文学教育を行う教員もそこに学生の意識を向けさせる。そこでの学びが教育現場の実践に活きる必要なスキルとして発展していくよう授業内容をアレンジする。

教育現場の授業者が行う教材研究では、学習目標を達成する観点から、テキストの教材性（その作品を使って何が教えられるか）が吟味される。その目標にそって文学作品の細部が検討され、何を、どこまで、どのように教えるかが決められる。教員養成大学で文学教育を受ける学生は、読解力を修得するだけでなく、教材の体系性や系統性を適切に理解し、どこから整理をはじめ、順を追ってどこまで教えるかを見極める力を修得しなければならない。

読解した内容を、教育現場における具体の授業にかけるための内容や手順として理解し、整序できる力のことを「教科内容構成力」と呼ぶことにしたい。その力は、解釈の多義性の幅やその深淺を細分化して理解することの出来る力、細分化した各要素を学習目標のゴールに向かって段階的系統的に組み立てることの出来る力が合わさったものである。その2つが出来るようになるためには、作品読解の能力を「読むこと」「解釈すること」「批評すること」の各次元において修得するとともに、読解した内容を細分化する能力、細分化した各要素の教材的価値をはかる能力、教育課程をふまえた目的の設定、提示の仕方や組み合わせを考える能力、必要な補助資料を揃える能力等を修得する必要がある。

授業者が授業を行う前に、何を、どこまで、どのように教えるかを冷静に組み立てる「教科内容構成力」を育成するために、次の手順を考えてみたい（カッコ内は評価規準）。「教科内容構成力」は授業者が身につけなければならない能力である。文学研究が文学教育に特に寄与しうる点は、授業者が教室に入る前に行う、教材開発を含めた、文学テキストを教材に変換するための読みの細分化と組み合わせの活動においてである。

1. 読む (書かれてあることが理解出来る)
2. 解釈する (隠されていることが理解出来る)
3. 批評する (書かれていないことについて考えることが出来る)
4. 細分化する (1～3の成果を細分化することが出来る)
5. 教材性を吟味する (細分化したものの教材的価値をはかることが出来る)
6. 目的を設定する (教育課程をふまえて目的を具体的に設定することが出来る)
7. 組み合わせを考える (提示の仕方や組み合わせを考えることが出来る)
8. 材料を整える (必要な補助資料を揃えることが出来る)

授業者が教材化を目的として、文学テキストの教科内容構成を考えるために取り組んだ「読むこと」「解釈すること」「批評すること」の成果は、授業者が学習者に修得させたいと考える能力の目標に沿って、取捨選択されながら、何を、どこまで、どのように教えるかが組み立て直され、再び授業実践の場に持ち込まれる。以上の手順に沿って文学テキストが文学教材として授業者の前に準備された後、今度は生徒の実態に即した指導方略や板書・発問計画、学習活動の展開等といった授業実践に係る種々の細やかで動的な手立てが講じられることになる。

本稿で取り上げる文学テキストは、小川未明の童話「眠い町」である。文学教育を行う上で有効な対比関係、コードの関係が「眠い町」にはあり、また郷土教材としての有効性も潜在している。教科横断的な能力を養う意味でも効果的な作品である。「眠い町」は、これまで教材化されることはなかった。「眠い町」を例にあげ、「教科内容構成力」の育成に係る手立ての有効性について、以下、検討してみたい。

2 未明文学の動向と「眠い町」

小説家として出発した小川未明が童話を本格的に書きだすのは、長女晴代が病没した大正7年以後であるが、未明作品の中に少年主人公を中心とする小説が初期作品から数多くあったことや、明治43年に童話集『赤い船』が刊行されていたことなど、未明に童話作家としての素地があったことは周知のとおりである。

明治期の未明の小説を評し、相馬御風は、未明が「人間生活の根底」や「人間生活の意義」を求めたと述べた^(註1)。未明は過酷な運命に翻弄される無力で弱い人間の存在を、未明の故郷高田の雪国・北国の暗い風土を舞台に描き続け、後には運命を人間の手で変えていこうという熱い思いに貫かれた社会主義文学を書き進めた。無力で弱い人間、虐げられた人間への共感、未明が子供時代を暮らした雪深い高田の気候風土やさびれた城下町を舞台に展開された、近代化の過程で生み出された人間の軋轢を見聞きしたことから生じたものであろう。

貧苦のなかで長男哲文を疫痢で亡くした大正3年における不幸は、未明にいっそう小説の主題を掘り下げさせ、強く深刻な思いを作品に表白させることとなった。大正3年の長男の死は小説家としての使命感をいっそう強固にさせ、大正7年の長女の死は童話作家への転進と社会主義運動への積極的参加をうながした。社会改造を願う未明の思いが強くなればなるほど、未明の童話は彼らしい特質を鮮明にし、量産されていった。今日知られている未明童話の多くは、大正中中期から後期にかけて書かれたものである。

「眠い町」は、「日本少年」大正3年5月号に掲載された。明治43年12月、未明は28歳で最初の童話集『赤い船』を刊行するが、その後は小説に力を注ぎ、第2童話集『星の世界から』(岡村書店)が刊行されるのは、『赤い船』刊行後8年経った大正7年12月のことである。「眠い町」は未明が小説に主軸を移した時期と、童話作家として盛んに活躍する時期との中間に書かれた数少ない童話の一つである。自然破壊や環境破壊を憂える「眠い町」は、未明童話のなかでは特殊なテーマを扱っていると言ってよい。もっとも、近代化や都市化、資本主義社会の発達は、未明にとって、本来自然の人間性を損うものとして強く意識され、未明の小説においては繰り返し主題化されてきた。そのことは、未明の文明観や近代化に対する姿勢について述べた秋山清の次の文章^(註2)からもうかがえる。

その(未明の-小埜注)アナキズムの志向は、資本主義の強力化に伴う機械文明的生産の発達と無産階級の増大とその貧困化という現実を前にして、人が人を支配し搾取すること、戦争の非人間化、自由及び反権力等、ヒューマニズムの究極として到達したものの如くである。

それはどこか、文明の発達は社会生活における本来自然の人間性を損うものだという立場に近く、今日の社会的現実を革命して理想的社会出現の為に闘うというよりも、現実を侵害するものの強力な圧制から守ろうとする、ネガティブに力点のおかれるものであった。

「未明は詩人を自然の神秘の認識者としてばかりではなく、人生のために闘い尽くすような実践的な行為者としての使命において意識していた」と述べたのは、瀬沼茂樹である^(註3)。未明の「文明と云ふものに対する激しい憎悪と呪詛」について最初に指摘したのは相馬御風である^(註4)。未明の小説に、時代や作者のコンテキストが影響を与えているのは明らかだが、小説と童話の間にも密接な関係がある。未明童話の場合も、童話のフィクションの向こう側に、現実世界が角度を変えながら身を寄せている。「眠い町」は、時代の意識や未明の思いが分かりやすいかたちで表されている童話である。

3 「眠い町」の読みの細分化

「眠い町」を教材化するためには、最初に「眠い町」の読解を授業者自らが深める必要がある。上述の手順でいえば、1. 読む、2. 解釈する、3. 批評する、を「眠い町」について行わなければならない。「眠い町」については、すでに文学研究の立場から論じたことがある^(註5)。それを参照し、ここではさっそく、4. 細分化する、の手順に進むこととする。

「眠い町」は、自然・環境破壊の問題を訴えた童話である。少年ケーは〈眠い町〉と呼ばれる不思議な町へやってくる。旅人がこの町へやってくると誰もが自然に眠りこんでしまうが、ケーもまた同様に眠ってしまう。しかし眠ったケーは老人に起こされ、次のような頼みごとをされるのである。「私はこの世界に昔から住んで居た人間である。けれど何処からか新しい人間がやつて来て、私の領土を皆な奪つてしまつた。」「かうして行くと、いつかこの地球の上は一本の木も、一つの花も見られなくなつてしまふだらう。」「今の人間は少しの休息もなく、疲れと言ふことも感じなかつたら、瞬く間にこの地球の上は沙漠となつてしまふのだ。私は疲労の沙漠から、袋にその砂を持つて来た。私は背中にその袋を負つて居る。この砂を少しばかり、どんな物の上にもでも振りかけたなら、その物は直ぐに腐れ、錆び、若しくは疲れてしまふ。で、お前にこの袋の中の砂を分けてやるから、これからこの世界を歩く処は、何処にでも少しづつ、この砂を撒いて行つてくれい。」

ケーは老人の頼みを聞き入れ、「疲労の砂」をもって地球上の各所を旅し、都市化・近代化の行き過ぎたところに出会うと、砂を撒く。すると山から切り出された大木を運ぶ鉄道レールは錆び、小僧を轆きかけた自動車は止められ、働きずくめの人々には休息がもたらされた。近代化の行き過ぎから自然が破壊されても、人々はなおも働き続ける。それを阻むために建てられた町として〈眠い町〉は登場する。しかし、ケーが砂を撒き続け、砂がなくなったので〈眠い町〉へ戻ってみると、〈眠い町〉には工場の煙がみなぎり、ケーを驚かせたという話である。

以下、解釈を細分化してみたい。

- ① 「眠い町」は、田舎が都市化し、自然が文明に奪われる話であり、地方の都市化や近代化、自然の文明化に対する警鐘を鳴らす作品である。
- ② 砂が無くなり、〈眠い町〉に戻ってみると、町は都市化・近代化の波に侵されていた。都市化・近代化は、人が思う以上の速さで進むことを述べている。
- ③ 物質的豊かさや金儲けに走る人間の生き方への批判、あるいは反省をうながす作品である^(註6)。自然と人間、自然と文明が対比的に捉えられ、人間はどう生きるべきか、文明とはどうあるべきかを訴えた作品である^(註7)。
- ④ 「実は私がこの眠い町を建てたのだ」という老人の言葉に注目すると、〈眠い町〉が近代化の過程でそうあるべく意図して建てられた町として描かれていることが分かる^(註8)。その町は誤った近代化の道を歩む人々に、癒しと覚醒を与える。〈眠い町〉に住む人々は、そのことに胸を張ることが出来る作品である。
- ⑤ 少年ケーが結末で「眠い町」が無くなったことに対し、眼を見張った後、どのような態度をとるのか、読者が主人公なら、どのような態度をとるのかなどの問題に意識を向けさせる作品である。
- ⑥ 地方の多くは「眠い町」同様の歴史をたどった。豊かで自立していた地方が、いつしか〈眠い町〉となり、資本が地方に流れこむことで、〈眠い町〉でさえ無くなる経緯をたどった^(註9)。地方の疲弊は、近代社会が生み出したものだが、近代化の圧力は地方の人々の心をひずませたことを考えさせる作品である。
- ⑦ 「表日本」の近代化の過程が北国の町を〈眠い町〉に化し、その後、近代化の波が〈眠い町〉をのみ込んでしまう過程は、日本海側と太平洋側の近代化の力学から説明される。「眠い町」は未明のふるさと高田の歴史が刻印された作品である。

以上、細分化したものを要約すると次のようになる。

- ① 自然破壊・環境破壊への警告
- ② 都市化・近代化の足取りの速さ
- ③ 近代人の虚偽の生活の批判
- ④ 癒しと覚醒を与える町
- ⑤ ケーの生き方や近代化の是非について
- ⑥ 町の変貌理由やその影響
- ⑦ リアルな郷土の歴史の刻印

4 教材性の吟味と目的の設定

「眠い町」は、解釈の多義性やその深浅に多様な段階性をもった作品である。学習者の読解能力と意欲次第で何度も読み深めていくことが出来る。①については、「読むこと」の整理において最初に学習者に理解される点である。②については、「眠い町」の結末部分に留意すれば、理解される。③については、「新しい人間」がどのような働き方をしているのかに気づけば、理解される。④については、「この町はわしが作ったのだ」という老人の言葉に注意を向け、自然と文明、田舎と都会の問題が描かれていることに気づけば、〈眠い町〉を肯定し、胸を張って生きること意識を向けさせることが出来る。⑤については、「批評すること」の観点から種々の学習を展開させることが出来る。⑥については、近代化がどのような経緯で行われ、影響を与えてきたかに目を向けさせることになる。⑦については、郷土教材として「眠い町」を捉えさせることになる。

「眠い町」の教材的価値の第一は、解釈を何度も更新していけるところにある。「解釈すること」の意義や楽しさを見童生徒に味わわせることが可能なテキストである。さらに「批評すること」において、今の豊かな生活を捨て、〈眠い町〉の生活を選び取ることが出来るかどうかを見童生徒に考えさせることも出来る。地方創生の問題とからめた今日的課題として「眠い町」を捉えることも出来る。どうすればよいのか答えのない問題を見童生徒が懸命に探ろうとするところに思考力育成の鍵がある。このままでは〈眠い町〉も消滅する。消滅可能性をもった地方を活性化させるには、どうすればよいのか。なぜそのような事態が起きたのか、地方にも看過できない負の影響があったのではないかという視点を学習者に持たせることが重要である。「眠い町」を読み深めていくと、社会科の勉強と重なるところが出てくる。教科横断的な学習がなされる意味での教材性の豊かさもある。

「眠い町」は、環境問題や自然破壊、近代化の是非、豊かな暮らしとはどのようなものか等について、教科横断的な学習と接続させ、学びを思考力や実践力育成に向けて展開していくことのできる作品である。また郷土教材としての価値も豊かにもっている。未明は学生時代に、中学教師から郷土である高田の町を〈眠い町〉と呼ばれたことを記憶していた。「眠い町」を郷土教材として読んだとき、〈眠い町〉を郷土とする見童生徒にとって「眠い町」の受け取り方は格段に違ってくる。

教材としては、①から⑦へと順番に学習を進めていくことも出来るが、本稿では、⑦の「リアルな郷土の歴史の刻印」を中心に学習することを目的として設定してみたい。学習目標となる「何を」の内容を、北国・雪国の風土や生活、文化等の郷土性を理解し、それをもとに心豊かに、自信をもって子供たちが生きていく態度と希望を育む、と設定した場合、④の癒しと覚醒を与える町としての作品理解が重要になってくるが、郷土を描いた作品を用いて、それぞれの地域に住む見童生徒が自らの郷土を愛し、それを糧に、胸を張って生きていく姿勢を養うことは、地方分権、地域主権が叫ばれる今日、重要になっているとはいえ、それだけでは地方創生が望めないことにも目を向けさせた。郷土を愛し、胸を張って生きていく姿勢を養うためには、⑥の「町の変貌理由やその影響」を考え、人心のひずみやそこに胚胎する問題をどう解決していかなければならないかを⑤の観点から学習者自らが主体的に考えていく必要がある。教材の背景にある時代状況との関連を考えようとする場合は、コンテキストやコードを考えるための資料も必要になってくる^(注10)。

かかる学習を行うことを想定した場合、対象となる見童生徒は中学生以上が適当であろう。このことは、現行「中学校学習指導要領」(平成20年9月)の「総則」にある「我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図る」という考え方も合致する。

5 組み合わせと材料の整理

郷土の変貌を種々の資料を用いて整理し、高田の町が「眠い町」と同様の経過をたどったことを児童生徒に実感させることが重要であろう。リアルな郷土の歴史が「眠い町」のコンテクストに置かれていることに気づかせる必要がある。さらにその変化の理由や経緯の中で人々がどのような影響を被ったのかを考えさせる必要がある。「新しい人間」がやってきて、休むことも知らずに働き続けている。人心のひずみといったものは「眠い町」のテキストレベルではあまり語られていないが、後の随筆では、未明の郷土である高田の人々を「因循姑息」と呼んでいる^(註11)。

組み合わせは、⑦の学習を目的とした場合、理由や影響を考える⑥が次の学習となるが、⑦の学習に入る前に①②③④も順を追って整理し、確認させるべきであろう。とりわけ④の「癒しと覚醒を与える町」の解釈は、「眠い町」を肯定的に捉えさせる視点となるが、この④と対比させる形で、⑦「リアルな郷土の歴史の刻印」や⑥「町の変貌理由やその影響」においては、人心のひずみが問題となってくることを意識させる必要がある。

⑤は「批評すること」に分類されるものである。現代を生きるわれわれがどう生きていけばよいのかという問題は、最後に議論されるべきであろう。その視点は、汎用的能力である実践力を養うものとなる。今の時代ならどうか、学習者個々人が少年ケーならどうすべきだろうかという視点は逸するわけにはいかない。そのことに十分留意させたい。どのよう社会を形成していくべきなのか、そのためにどのような行動が必要なのか、コミュニケーション能力や集団形成能力、合意形成能力が必要なことに気づかせたい。新しい学習指導要領では、教科内容を越えた汎用的能力を各教科で育成させようとしている。見え方・考え方を養うとともに、最後にはどのような社会をつくりたいとするのか、学習者一人一人が社会に参画する実践力の育成も目指されなければならない。

「眠い町」を文学教材として読んでいくうえで必要な補助資料とは、どのようなものであろうか。ここも拙稿で取り上げた資料^(註12)を使うこととしたい。小川未明の「眠ってゐるやうな北国の町 私郷里」(「文章倶楽部」大正10年11月)に次の一節がある。

一体、高田といふところは、活気に乏しい。寺が沢山で森が多くて、煙突が少く、維新この方、幾十年の長い間、眠るやうな所であつた。中学にゐる時、英語の教師が生徒に向つて、その時分は未だ町であつた高田を形容して「ねむい町」といつたことがある。今だに私の頭に残つてゐる。(中略)東京へ来てから後に、高田に師団が設けられて、町が變つて市となつた。それで子供の時分に小学校へ行つた時、通つた町はどうなつたらう、或は七つ八つの頃、鬼ごとをしたり、独樂をまはして遊んだ村はどうなつたらうと思ふことが、長い間であつた。或る年に歸つてみたが、昔、鞆を下げて学校へ出た道、又祖母に連れられて、頭痛の禁厭をしてお寺へいつた通など、大分變つてしまつてゐた。(中略)蜻蛉を釣つた桑畑や、隠れ鬼をした森などは開かれて、そこに大きな建物が立つてゐる。

この文章を示すところから、「眠い町」の郷土教材としての学習は始まる。『上越市史〈普及版〉』(平成3年10月、上越市)には次のような説明がある。

電力の需要は当初少なかったが、電力が豊かであるということが有力な条件の一つとなって、高田に第十三師団が設置(明治41年-小笠注)されたり市制も施行(明治44年-小笠注)されて各種の産業も興り、電力需要も増加した。その後も、この安くて豊富な電力が要因になって多くの工場が進出し、農村の機械化も進んで電力の需要が急増したので、関川水系には次々と発電所が建設された。(211頁)

高田の町の変貌は、未明の文章にあるように、陸軍第十三師団の軍隊の設置が大きな働きをした。『上越市史〈普及版〉』には、次のような記述がある。

旅館や料亭などは、将校たちの宴会や宿泊を見込んで、競って近代的な洋風建築を進めた。(中略)その他、銀行・市役所・警察などの諸官庁もしだいに洋風に建て替えられ、軍の施設である師団長官舎や偕行社などにも様式建築が取り入れられた。(212頁)

軍隊の誘致や電力需要が高まった背景には何があつたのか。郷土の近代史の学習と関連づけて、次の資料に類するものに学習者がたどり着くよう導く。古厩忠夫『裏日本-近代日本を問いなおす-』(岩波新書、1997年9月)には、次のような記述がある。

産業革命は資本・労働力・エネルギー資源など、いわゆる資本の本源的蓄積を前提とする。植民地をまだ獲得していなかった日本にとっては、国内農村地帯からの蓄積が必要不可欠となる。それは、内国植民地北海道から九州・沖縄にいたる全国に及んだが、太平洋ベルト地帯と脊梁山脈を挟んで位置する裏日本は絶好の後背地と目され、ヒト・モノ・カネの移転システムが、表と裏の明確な対照性をみせつつ形成されていった。(36頁)

人口面での「裏日本」化、つまり資本主義化への巻き込まれ方は、東北より北陸・山陰の方が著しく、とくに日本一の人口大県だった新潟県は人口流出の時代を迎える。流出の第一のパターンは、農家の次三男を中心とする東京・大阪など大都市への流出である。(45頁)

裏日本にとって大正期はデモクラシーの面だけでなく、周回遅れの感はあるものの、明治期に待望してやまなかった鉄道・港湾など社会資本の整備がおこなわれ、そして対外的にはシベリアブームで日本海の対岸への「期待」が膨らみ、さまざまな夢が語られた時代でもあった。(58頁)

古厩は、近代化の過程で日本海側のヒト・カネ・モノが太平洋側の都市に吸い上げられ、徐々に日本海側が疲弊していくさまを説明している。未明の青年時代は、日清・日露戦争の間にあり、故郷が徐々に痩せていく時期であった。日本海側の資本が奪われ、太平洋側の人々の暮らしとの間に格差が生じ、「裏日本」という言葉が浮上してきた時期、つまり郷土の高田が〈眠い町〉になった時期を、氏は次のように記している。

立ちおくれが太平洋側との、「表と裏」という構造的な格差として認識されてくるのは日清戦後のように思われる。(79～80頁)

日本海側が太平洋側の近代化・都市化の波及効果をうけ、「周回遅れ」で近代化するのは明治時代末から大正時代にかけてであった。〈眠い町〉は近代化の波に浸食された地方都市の比喩、すなわち未明の郷土高田の歴史であり、やがてその地方都市に近代化の波が押し寄せ、〈眠い町〉でさえなくなったことを表している。「眠い町」は、未明自身の思いに立ち返って解釈するなら、未明の故郷にケ-を立たせ、その変貌を近代史の流れのなかで捉え、〈眠い町〉が〈眠い町〉でなくなった故郷の現実を描いた作品と読める。

老人から「疲労の砂」を預かり、世界を旅しながら砂を撒いた少年は、未明自身のように読める。都市生活者となった未明は、文明を否定し、人間本来の生活に戻ることを訴えたが、自らが育った郷土自体が〈眠い町〉の価値を失うことになった。文明化・近代化がもたらす負の鈍先は、郷土をも突き刺したわけである。こうした現状をよく認識し、未明は作家活動を続けた。少年ケ-の砂は尽きたが、未明の砂は尽きたわけではない。その砂は大正期中期から後期にかけてもさかんに撒かれたし、〈童話作家宣言〉後も童話を通じて撒かれ続けた。金の論理によって動く資本主義の世の中が、郷土を含む田舎の人の心をいかにひずませたのか、未明の小説で例をあげると次のようになる。

「仮面の町」(「早稲田文学」大正13年1月)では、郷土を指して「それは、自滅を急ぐやうな町だつた」と語っている。そこに住む人々には、冒険心もなければ、新しい文明を受け入れる気もなかったという。あるがままの生活を壊さないように、先祖の遺した財産には手をつけず、銀行に預けて殖やすことが最高の道徳だったと語る。Nは、貧しい家庭に育った。親類に裕福な暮らしをする絹糸問屋があったが、貧乏ゆえにつきあいはなかった。株で失敗した東京の親戚が絹糸問屋の親戚を頼って帰ってきたとき、親戚は貧しくなった親戚を邪慳に扱い、援助を断った。男は北海道へ向かう途中、海に身を投げた。Nの母は、絹糸問屋に行き、あまり情がないからこういうことになったのだと責める。Nをソシアリストにした動機の蔭には、こうした事件が潜んでいたと言う物語である。

「真実を踏みにじる」(「農民」昭和3年8月)では、豪農の門の内側に主人の自慢の大甕が置かれていた。子供たちは、甕に仲間が落ちたらどうやって助けるかについて話し合っていた。甕を破って助けると言い得るものはなかった。Kはみんなの顔を見まわした。その頃、一人の老僧が村へ入ってきて、門口で経をあげた。しかし、金持ちの主人は、鉄鉢に石を入れて追い返した。それを見たKは、「真実を踏みにじった、あの甕を破れ!」と言って、石を投げた。その行為によって退校させられたKは、被搾取者の解放運動の集団に加わった。真実だけが、子供の時分から彼の魂を揺り動かしたと言う。甕に仲間が落ちたらどうするか、作中では老僧がその仲間の一人として捉えられている。貧しいもの、弱いものを救わなければならないというのが、未明の「真実」であった。

6 郷土教材の可能性

郷土の豊かな自然や文化、郷土の偉人の生き方や歴史を学ぶことを通して、現代社会に生き、未来を担う子供たちや若者に、「地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める」^(註13)ことが求められているが、おそらくそれだけでは、郷土の発展に寄与することはできない。地方は〈眠い町〉が〈眠い町〉でさえ無くなる過程において、大事な何かを失った。かつて筆者は、「新潟日報」に次のような文章を寄せたことがある^(註14)。

「地方創生」法案が昨年末に成立して以来、地方の人口減少に歯止めをかける地方創生の実現は、待ったなしの国民的課題となった。人口急減、少子高齢化などの難題に立ち向かう魅力ある地方をどう創っていくのか。地方経済に対する国の支援が整備されることは望ましいが、地方が抱える今日の問題の根は深く、地方創生の立案主体を地方に委ねたところで、このままでは、その根に触れることができないまま、衰微していく地方は少なくないだろう。」

「地方は均一化し、個性を失い、アイデンティティを形成する場ではなくなっている。インターネットによって、いながらにして都市文化が流入してくる。そういう地方の暮らしを享受する人もいれば、都市に憧れる人もいる。一方、地方の現状に危機感を覚える人もいる。地方の「消滅可能性」(日本創成会議)が言われるようになり、その意識は強まった。」

この文章では、前述の「根」に届くヒントを、「眠い町」(大正3年)に探ろうとした。「眠い町」には、働きどおしの人々に眠りを与える安らぎの町が登場する。この町のモデルは、未明の故郷高田(上越市)であろう。未明は、衰微した故郷の町を癒やし町として捉え返した。地方の人々が〈眠い町〉を積極的に捉え直し、胸を張って生きる。都会の賑やかさより、心に安らぎを与える田舎の平穏な暮らしを選ぶ生き方は、いさぎよい。「だが実際、近代化が与える恩恵をなげうつことは難しい。「眠い町」も、眠りを与える町に工場が建ち、煙が上る場面で終わる。この結末は近代化・都市化の速さを伝えたものだが、同時に〈眠い町〉の住人が近代化の恩恵の方を選んだことを物語る。思えば、地方の多くは、「眠い町」同様の歴史をたどってきた。豊かで自立していた地方が、いつしか〈眠い町〉となり、資本が地方に流れこむことで、〈眠い町〉でさえ無くなる経緯をもった。」

この移行は、何を地方にもたらしたのか。「未明によれば、地方における種々の問題は、都会と田舎の格差から生じた。ヒト・カネ・モノを集める資本主義は、都会と田舎の格差を拡大させ、格差は地方内部に波及し、種々の上下関係を入れ子のように生み出した。」「未明は、長いものには巻かれる式の、因循姑息が近代化の過程で生れたという。地方の疲弊は、近代社会が生み出したものだが、近代化の圧力は地方の人々の心をひずませ、心の回復をはからない限り、近代化の犠牲者がときに加害者となりうることを訴えている。」「〈眠い町〉のはるかその後を生きる現代人は、地方文化に都市文化が入り込んでいる状況を正負ともに見きわめ、郷土の暮らしを考えていく必要がある。郷土の暮らしに正対する経験が、地方創生へと私たちを向かわせる。かつてあった豊かな地方の原郷の回復を願い、あわせて心の回復を図らねばならない。小川未明文学は私たちにその〈経験〉を与えてくれる。」と結んだ。

未明は、資本主義がもたらした日本の近代社会の弊害を改めようとした。未明の批判の目は、現代社会にも向けられている。未明は終生、雪国の憂鬱で暗い自然をおのれの視座とした。未明文学は〈裏日本〉と呼ばれた土地に根を張り、雪や風を栄養として育った。郷土である高田が〈眠い町〉となり、〈眠い町〉でさえなくなった状況をふまえ、「眠い町」を書いた。その過程で失われたものを取り戻す戦いが、未明文学の本領であった。未明は、田舎から失われたものは何だと考えていたのであろう。それは、相互扶助の精神であり、貧富の差のない社会、愛と正義に満ちた社会であったのではないか。日本海側の町の疲弊を、未明は子供の頃から見えてきた。〈眠い町〉が〈眠い町〉ですらなくなったという感慨をもったとき、未明には反対に〈眠い町〉以前の町が強く想起された。その町は、文明の対極にある町である。

未明は、自分のアイデンティティを形成した場所として、子供時代を過ごした郷土を深く愛した。しかし一方で、前述したとおり、未明は郷土を必ずしも好もしく思っていなかった。複雑な愛憎の念をもって高田の町は捉えられた。未明の郷土は、癒しを与える場所だけでなく、近代化の波に浸食され、改められねばならない場所でもあった。今の時代を生きる人々は、郷土が〈眠い町〉でさえなくなったはるか先の時代を生きている。グローバリゼーションが進むなか、町は個性を失い、若い人は、何を失ったのかさえ分からない状況にある。居ながらにして世界中の情報が入ってくる。郷土の個性が失われた暮らしの中で、郷土愛と言われても十分な関心は持ちえないであろう。今日、郷土のありようを私たちはどう理解したらよいのか。グローバリズムとローカリズムをたえず往還しながら、郷土の暮らしを考えていく必要がある。

7 成果と課題

「教科内容構成本力」という能力の育成を図るために、8つの手順を示し、その手順が具体的なテキストに当てはめるときに有効であるかどうかを検討した。1. 読む, 2. 解釈する, 3. 批評する, 4. 細分化する, 5. 教材性を吟味する, 6. 目的を設定する, 7. 組み合わせを考える, 8. 材料を整える, の手順に則り、小川未明の「眠い町」を教材として教室に持ちこむところまで準備することが出来た。教科内容構成に関する知見は、教材開発の際には必ず必要になるし、文学テキストを教材として扱うときにも必要になってくる。暗黙知もしくは経験知として、これまで授業者が磨いてきた能力が「教科内容構成本力」であった。その意味で本稿の意義を、8つの手順を示し、その有効性を具体的なテキストで検証したところに見出したい。本研究がさらに十分な意義を持つとすれば、この手順に従い、それぞれの能力育成の手立てがしっかり組み上げられたときであろう。1～3については文学研究において蓄積がある。今後は4～8の各能力をいかに育成していけばよいのか、その方法を考察していく必要がある。

また、授業者が文学テキストを教材化していくときの観点として8つの手順を設けたが、学習者が教材を学ぶときの手順はこの8つの手順とは異なる。学習者が学ぶ手順は、本稿第3節で示した①～⑦のような細分化した読みを組み合わせたものが中心となる。つまり、7. 組み合わせを考える、をもとに学習者の学びは再構成される。教科内容構成の在り方から教材化したものは、学習者の側からもう一度丹念に捉え返されなければならない。教科内容構成を考えるとき、学習者の視点をどう扱うかは今後の課題である。

* 「眠い町」のテキストは『小川未明選集 第五巻』（未明選集刊行会、大正14年12月）所収のもの、小説等のテキストは『定本小川未明小説全集』（講談社、昭和54年4月～10月）所収のものを用了。全集未収録の感想類は、初出誌・紙に拠った。原文を引用するさいは、いずれも旧漢字を新漢字に改めた。

注

- 1 「早稲田文学」明治45年1月。「純粋な芸術的見地を離れて、それを一個畸形なる北国の蛮人が人間生活の根底を攫まうとして苦悶して行く心の歴史として味ふ時は、現代の作家の何人からも味ふ事の出来ない或る一種の人間生活の意義を痛感し得られると思ふ。」
- 2 「アナキスト・小川未明」（「文学」1961年10月）
- 3 「小説家としての小川未明」（「文学」1961年10月）
- 4 注1に同じ。
- 5 「〈小さいヒーロー〉から〈戦うヒューマニスト〉へ—小川未明「眠い町」論—」（「上越教育大学国語研究」2014年2月）
- 6 近代人の虚偽の生活への批判は、「眠い町」と同年に発表された未明小説「無智」（「第三帝国」大正3年1月10日）にも顕著である。貧しい労働者が仕事に命を落とす。人生のための文明であり、社会である。この分かりきったことが分からないことを「無智」と呼んでいる。同様のことは、小説「酒場」（「読売新聞」大正3年4月27日）でも、文明の都会に餓死する人がいるのは不思議なことだと述べている。金や物質の豊かさばかりを求め、社会に犠牲者がいることを考えないというのである。
- 7 「眠い町」が発表された大正3年に第一次世界大戦がはじまる。「眠い町」は個人を蹂躪する戦争の大きな力との関連を考えさせる作品でもある。近代化が人間にもたらす抑圧や疎外は、戦争における個人の自由の束縛と強制に共通する。「欧州戦争観 少数の自我に味方せん」（「文章世界」大正3年9月）のなかで、未明は暴力の前に正義が蹂躪される時代の到来を次のように憂えている。「自我が戦争を否定しながら、尚ほ戦争に赴かなければならぬ人間程不幸の者はない。多数の前にありては、常に少数の意志は圧迫せられるのが常である。（中略）芸術家は常に少数の自我を代表して戦ふヒューマニストでなければならぬ。真理のために殉じなくてはならない。」
- 8 未明は、〈眠い町〉に人を惹きつける魅力があることを知っていた。人が自然とまどろみ、白昼夢を見るような場所の価値を未明が知っていたのは、かつてそこに暮らし、その後、都会に暮らしはじめたことで、両者を比較する視座を得たからであろう。
- 9 未明は、資本主義が都会と田舎の格差を拡大させ、格差はやがて地方内部にも波及し、種々の上下関係を生み出すと捉えている。近代社会がもたらした人心のひずみを郷土に見出している。
- 10 文学テキストを作り上げるために働いた諸コード（テキストが作られたときの歴史状況や文化状況についての約束事やジャンルに関する約束事）を参照して意味を考えることは、解釈を進めるうえで重要である。作品の歴史的な背景や文化的な背景等、テキストの意味を背後で支えている約束事を前景化し、テキストの編成のありようを意識的に捉えるなら、テキストの特質は見えやすくなる。しかしコードの重要性は十分認めたくえで、従来のコードを鵜呑みにするのではなく、そのコー

ドが正しいかどうかもう一度コンテキストに立ち戻り、裏付ける必要もある。コンテキストを見直し、コードの再編を行うことで、新しいコードを見出すことが出来る。ジョナサン・カラーは、テキストの意味をそれが作られた時代の約束事（コード）に従って解釈することを「回復の解釈学」と呼び、コードを疑い、コンテキストに含まれるいまだ分析されていないものを明るみに出すことを「疑いの解釈学」と呼んでいる（『文学理論』2003年9月，岩波書店，101頁）。自分の感覚や知識だけに捉われることなく、時代や文化のコードに従うべきである（回復の解釈学）が、その一方で疑うべきである（疑いの解釈学）。

- 11 「眠ってあるやうな北国の町 私の郷里」（「文章倶楽部」大正10年11月）に次の一節がある。「どつちかと云へば、私は郷里の人々を好まない。（中略）その原因は何処にあるかと云ふに、因循姑息といふことに起因する。自然が陰鬱であつて、雪が沢山に降る。さう云ふことからの宿命観があるばかりでない。彼等の忍耐には、損とか得とかいふことが、すでに原因してゐる。「長いものには巻かれろ」といふ諺をその儘信じてゐる。地主や金持の權威を振ふ土地にあつては、致し方のないことかも知れぬ。」
- 12 注5に同じ。
- 13 「中学校学習指導要領」（平成20年9月）の第3章「道徳」
- 14 「新潟日報」2015年3月27日

The Appropriateness of Mimei Ogawa's "Sleepy Town" as Teaching Material: About the Contents Constitution of Teaching Material

Yuji ONO*

ABSTRACT

The purpose of this study is to examine a method of employing the results of research into the literature in education from the contents constitution of teaching material.

A student learning literature education in a teachers' college must acquire the following abilities.

Not only students learn comprehension about the literature, but also students understand system characteristics and the systematicness of the teaching materials appropriately and must learn power to make sure of from where to where he tells the teaching materials. In addition, it is necessary to acquire the ability to subdivide interpretation contents about teaching materials, the ability to measure the value each subdivided element of the teaching materials, the ability to set a purpose of the literature education on the basis of a curriculum, ability to think about the combination of each element, Ability to prepare a supporting document to perform literature education effectively.

When such a procedure of the literature education applied to a literary work, this study made clear that it was effective. The literature text that I chose as an example is the children's story "Sleepy Town" by Mimei Ogawa.